

“【源泉交遊】

「課題解決型図書館」とはどんな図書館？

特に「中央図書館」の設立に反対している訳ではなかったが、「東図書館の廃止」が「中央図書館整備の条件」となっている現状の下では、残念ながら「中央図書館」構想についても言及しない訳にはいかないことと成って来た。

市当局は「中央図書館」を“課題解決型図書館”にするとの構想を、市の広報誌を使って一番の“売り”として宣伝しているが、そもそも「課題解決型図書館」とはどんな図書館なのだろうか。具体的に説明してほしいものだ。多くの人々が多種多様の思いや課題を抱える現代社会に於いて、思いや悩みや希望などなど課題は多種多様であり、そのような人間の根源についての様々な課題を一挙に解決してくれる魔法の図書館が現実に出るとするのは理想論かもしれないが妄想であり、そんな図書館を提供してやろうという思いは、上から目線の一種の思いあがりの幻想に過ぎない。何だか新しい言葉や難しい言葉を使えば自分が高尚になり素晴らしく新しい人間になったと思うのは自由だがそれは錯覚である。課題解決型などと言うものは「図書館を設置」する側からの目線で決めつけて言えることではなく、あくまでも「利用する側」の市民が決めることの一部である。当局の物言いは何だかお箸の上げ下げまで当局に指図されているようで不快である。問題なのは、この当局の言動から透けて見える決めつけた物言いは“強権的”な政治姿勢と重なることだ。と同時に、住民無視の「東図書館の廃止」の方針とも重なる当局の姿勢である。そもそも課題解決型図書館と言う言葉はどこから拾ってきたのかは知らないが、このような言葉を新鮮に感じる人は、おそらく図書館については妄想を抱くことができても現実の図書館を知らない人に違いない。多分、図書館を利用したこともなく、利用したとしても滅多に利用しないない人に違いない。ましてや何かの課題の解決のために図書館を利用した実績は皆無に等しい状況の人々に違いないと思える気がする。そのような人から課題解決に使う図書館だと指図されても、おおかたの市民は大きなお世話だと思うに違いない。図書館はもっとおおらかに、課題が有ろうと無かろうと自由に利用するのが望ましいと思うのだが。勿論、課題を解決するために利用しても良いし、娯楽のために本を探しても、新聞や雑誌を見るのも、学生が宿題をするのも受験勉強するのも、幼児に絵本を読んであげるのも、憩いや休憩の場所など色々と利用できてこそ市民の図書館だと思うのだがどうだろうか。そんな図書館であれば、わざわざ硬苦しく嗜好を付けて“課題解決型”などと言わない方が自然で親しみのあるように思えるがどうだろうか。むしろこのこわばった当局の姿勢にこそ強権的匂いがするというものだ。お隣の国、香港では「一人の犠牲はみんなの幸せ」との考えの下、人権活動家が警備当局に拘束されていると聞くのは、強権政治の痛ましい現象である。が今、我が市の生涯学習部は「東図書館の犠牲は、夢のような素晴らし中央図書館の出現」と言う形で図書館政策を押し進めようとしているが、このような“強権的体質”こそが図書館政策の失敗を招く要因であるのだが。